

国立国語研究所学術情報リポジトリ

Actual Conditions and Changes in the Use of Double Notation in Lyrics : In the First Decade after the Birth of "J-POP"

| | |
|-------|---|
| メタデータ | 言語: jpn 出版者: 公開日: 2022-01-07 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 胡, 佳芮, HU, Jiarui メールアドレス: 所属: |
| URL | https://doi.org/10.15084/00003478 |

歌詞における二重表記の使用実態と変化

— 「J-POP」が誕生した後の10年間において—

胡 佳芮（一橋大学大学院言語社会研究科）

Actual Conditions and Changes in the Use of Double Notation in Lyrics: In the First Decade after the Birth of "J-POP"

Jiarui Hu (Hitotsubashi University Graduate School for Language and Society)

要旨

本稿は「J-POP」という概念が誕生した後10年間において、日本の流行歌の歌詞における二重表記の使用実態と変化を考察したものである。日本語は複数の文字体系が使用されているため、一つの語に対し、異なる文字体系を使って表記することができる。例えば、時間の意味を表す「トキ」という語の場合、漢字の「時」で書くのが一般的だが、ひらがなの「とき」で書いても良いし、カタカナの「トキ」という書き方も可能である。さらに、歌詞など特定の分野においては、「時間(とき)」のように語の直後に括弧を付け、読み方を括弧の中に示すという二重表記も存在している。そこで、本稿は1990年から1999年まで各年度オリコン年間ランキングトップ50入りの楽曲の歌詞を調査し、この10年間において歌詞における二重表記の使用実態と変化を考察した。その結果、二重表記が使用されている曲は調査曲数のうち約20%を占めており、これらの20%の曲において、二重表記は一曲あたりに2回の出現頻度で使用されることが判明した。二重表記の出現率は1990年から増加し、1993年と1994年において最大値となり、その後減少するという通時的変化が見られた。

1. はじめに

日本語は複数の文字体系が使用されているため、一つの語に対する書き方が複数ある。しかし、絶対にそう書かなければならないという正書法が確立していない(佐竹, 2005)。例えば、時間の意味を表す「トキ」という語の場合、漢字の「時」で書くのが一般的だが、ひらがなの「とき」で書いても良いし、カタカナの「トキ」という書き方も可能である。さらに、歌詞など特定の分野においては「時間」という書き方も存在している。このように「ある語を書く」際に、つまり「音声言語を文字化する」にあたって、一つの語の音声面が確定したとしても、それに対応している文字表記には選択肢がある。特に歌うことを目的にした歌詞の分野において、文字表記に関しては明確な基準もなく、作詞者による独自の用字法もあり得るため、表記の自由度がかなり高いと予想される。例えば、同じく「トキ」という語を示す場合、以下のような実例が見られる。

(1) 気ままな時間(とき) 感じてる

【出典】「It's Only Love」(1994) 福山雅治(福山雅治作詞)

(2) 優しさに触れる瞬間(トキ)が 幸せへ導いてゆく

【出典】「マイガール」(2009) 嵐(Wonderland 作詞)

- (3) 時空(とき)を超え 宇宙(そら)を超え
【出典】「時空を超え 宇宙を超え」(2014)モーニング娘。'14(つんく作詞)
- (4) でもこの今(とき)を生きるあなたを
【出典】「かたちあるもの」(2004) 柴咲コウ(柴咲コウ, 山本成美作詞)

上記(1)~(4)の例にある下線部で示すように、歌詞に出現している「トキ」という語について、「時間」や「瞬間」、「時空」、「今」のように意味を表示する部分（「主表記」と呼ぶ）と、「とき」や「トキ」など読み方を表示する部分（「副表記」と呼ぶ）との組み合わせによって表示されている。このように、一つの語に対して複数の表記形の選択肢の中からどれを選ぶかという作詞者の意志をより確実に表すため、意味を限定する主表記と読みを限定する副表記の両方によって構成される表記形式が「二重表記」と呼ばれている。泉(1993:96)は、二重表記を「日本語の表記の特徴や問題点を象徴しているもの」と捉えている。

J-POP の歌詞の日本語学的考察として、伊藤(2017)、小林・天竺・鈴木(2015)などが挙げられる。伊藤(2017)と小林・天竺・鈴木(2015)はともに、日本流行歌の歌詞は 90 年代を境に、外来語とカタカナの出現頻度が減少し、和語や漢語、漢字の使用が増加していくという「J-POP 歌詞の和風化」の傾向があると指摘したが、伊藤(2017)はこれを「日本語回帰」現象の始まりであると評した。そのほか、大出・松本・金子(2013)や左古(2015)のように、1970 年代から 2010 年代までの流行歌の歌詞に使用された語彙を意味の面から分析し、年代別変化を考察した研究も挙げられる。

また、二重表記に関連する先行研究について、当て字や振り仮名、漢字とルビの組み合わせなどを対象とし、それらがもたらす効果や用法を焦点に当てる研究が多く行われている。岩淵(1988)では、明治以降の文学作品対象に振り仮名の役割を考察し、意味を分担している漢字と読みを分担している振り仮名の両者を合わせて一つの語を示す「一体的役割」などがあると記述している。石黒(2005)はルビの必要性、創造性、用法の側面から、漢字にルビをつけることによってテキストの複線化が可能になると述べている。今野(2009)が平安時代から使用されてきた振り仮名の歴史を整理し、「読みとしての振り仮名」と「表現としての振り仮名」の 2 種類に分けられることに言及している。笹原(2011)は当て字の長所を考察し、表記は語義さえも拡張し、変化してしまう可能性を持ち、広い意味の当て字は文字の生産性と創造力を向上させたという結論に至っている。そのほか、短歌・俳句における二重表記を考察した研究として、短歌・俳句における二重表記は「主表記(漢字)-副表記(ひらがな)」のパターンが圧倒的に多いと指摘した泉(1993)が挙げられる。このように、日本ポピュラー音楽の歌詞における二重表記はまだ考察する余地があると考えられる。そこで、本研究は J-POP という概念が誕生した後の約 10 年間において、「J-POP」とされる楽曲の歌詞における二重表記の形態論的特徴を明らかにすることを目的とし、以下のような課題をもとに考察を試みた。

RQ1:1989~1999 年の約 10 年間において、J-POP の歌詞における二重表記の使用頻度はどのように変化しているか。

RQ2:1989~1999 年の約 10 年間において、J-POP の歌詞における二重表記はどのような形態論的特徴が見られるか。

これらの課題を明らかにするために、2節では、本研究における二重表記の定義と調査資料などの調査内容についてまとめる。次に3節では、この10年間における二重表記の使用頻度の変化を述べ、主表記と副表記に分けてそれぞれに見られる形態論的变化を整理する。続いて4節では、主表記と副表記の関係性から二重表記の形態論的特徴を考察する。最後に5節のおわりにでは、本稿のまとめと今後の課題を述べる。

2. 調査内容

2.1 二重表記の定義

泉(1993)の研究では、「仏教が全国各地に伝播(でんぱ)していった。」や「二十歳の門出」における「伝播(でんぱ)」、「二十歳」のようなものを二重表記としている。「伝播(でんぱ)」のように語形を括弧の中に示している場合と「二十歳」のように語形を振り仮名で示している場合の2種に分け、 で示した「語義」の部分「主表記」、括弧の中や振り仮名で示した「語形」の部分「副表記」としている。

本稿において、泉(1993)の定義を参考にした上で、J-POPの歌詞に出現している「他人(ひと)」や「時間(とき)」のようなものから、下記の条件1)および2)のいずれも満たす表記形態を歌詞における二重表記とする。

- 1)主表記にあたるものを常用漢字表と「大辞林」で調べると、副表記にあたる読み方が存在しない。
- 2)副表記にあたるものを常用漢字表と「大辞林」で調べると、主表記にあたる文字表記が存在しない。

このように、「他人(ひと)」や「時間(とき)」のように、語の表記面を示す「他人」の直後に、この語の音声面を示す「ひと」を括弧に入れて表記するものを「二重表記」とし、「他人」のような語の表記面を示す部分を主表記、「ひと」のように括弧に入り音声面を示す部分を「副表記」とする。本研究は主表記と副表記の両方を同時に着目する必要があると考えるため、ここでいう「主」と「副」という用字は、分析にあたって「主表記」と「副表記」の二部分に分けるための呼び方であり、どちらかが中心あるいはどちらかが付随であるという意味ではない。

2.2 調査の資料

1988年末に誕生した「J-POP」という言葉は、元々洋楽と肩を並べられるような邦楽のことを指していた。90年代に日本の現代音楽産業が巨大化するとともに、J-POPの意味が徐々に広がり、今や一つの音楽ジャンルとして扱われるだけでなく、演歌のような過去の歌謡曲とはっきり区別できる日本のポップス、ロック、ヒップホップなども包括する日本ポピュラー音楽の総称として認識されている。本研究では、1989年を起点とし、1999年までの約10年間において、各年度オリコンCDシングル年間売り上げランキング前50位の楽曲のうち、J-POP¹とされた楽曲の歌詞について調査し、本稿の二重表記の定義にあたるものを収集

¹ 「J-POP」と「演歌」について、明確で定着した定義がまだないため、本研究において、日本の伝統的な要素が多く含まれる「演歌」とはっきり区別できる日本のポピュラー音楽を「J-POP」とする。

した。その結果、合計 574 曲²の中の 113 曲において二重表記が使用されていることを確認し、これら 113 曲の歌詞から延べ 247 例の二重表記の実例を収集した。

3. 10 年間の変化

3.1 二重表記の概観

表 1 は 1989～1999 年の約 10 年間各年度上位 50 位の曲において、歌詞に二重表記が使用されている曲を年度別に集計したものを示した。ここで、二重表記の出現率とは、その一年の調査曲数(本調査の場合は 50 曲)における二重表記が使用されている曲の割合のことである。表 1 でわかるように、この 11 年間の調査曲において、歌詞に二重表記が使用されている曲が全体のうち 19.7%の割合を占めている。

表 1 にある太字で表示されているように、二重表記の延べ例数、歌詞に二重表記がある曲数、二重表記の出現率の 3 つの指標から見ると、最大値と最小値がそれぞれ 1993 年、1990 年である。二重表記が使用されている曲については、一曲あたりの二重表記の出現回数の平均的な最大値が 1995 年における 2.73 回/曲であり、最小値が 1998 年における 1.18 回/曲であることが見られた。

表 1 1989～1999 年の調査曲における二重表記の使用概観

| 発売年 | 1989 | 1990 | 1991 | 1992 | 1993 | 1994 | 1995 | 1996 | 1997 | 1998 | 1999 | 総計 |
|----------------------------|-------|-------------|-------|-------|--------------|-------|-------------|-------------|-------|-------------|-------|-------|
| 延べ例数 | 18 | 6 | 29 | 21 | 41 | 29 | 30 | 33 | 13 | 13 | 14 | 247 |
| 二重表記のある曲の数(N) | 9 | 3 | 12 | 10 | 18 | 13 | 11 | 13 | 6 | 11 | 7 | 113 |
| 二重表記の出現率(N/A) | 18.8% | 5.8% | 24.0% | 18.9% | 35.3% | 23.6% | 21.6% | 25.0% | 11.5% | 20.8% | 12.3% | 19.7% |
| 調査曲数(A) | 48 | 52 | 50 | 53 | 51 | 55 | 51 | 52 | 52 | 53 | 57 | 574 |
| 二重表記のある曲における一曲あたりの出現回数について | | | | | | | | | | | | |
| 平均値 | 2.00 | 2.00 | 2.42 | 2.10 | 2.28 | 2.23 | 2.73 | 2.54 | 2.17 | 1.18 | 2.00 | 2.19 |
| 標準偏差 | 0.82 | 0.82 | 3.09 | 1.22 | 1.41 | 1.42 | 1.71 | 3.62 | 1.67 | 0.39 | 1.60 | 1.98 |
| 中央値 | 2 | 2 | 1 | 2 | 2 | 2 | 2 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 |

²具体的に、1989 年～1999 年の各年度オリコン・リサーチ株式会社により提供されたオリコン年間 CD シングル売り上げランキングから、演歌や歌詞のない器楽曲、洋楽などを除外し、J-POP とみなされる楽曲の歌詞を調査した。なお、両 A 面 CD シングルや複数のメイン曲入りの場合はすべてのメイン曲を調査対象とした。その結果、合計 574 曲が観察された。

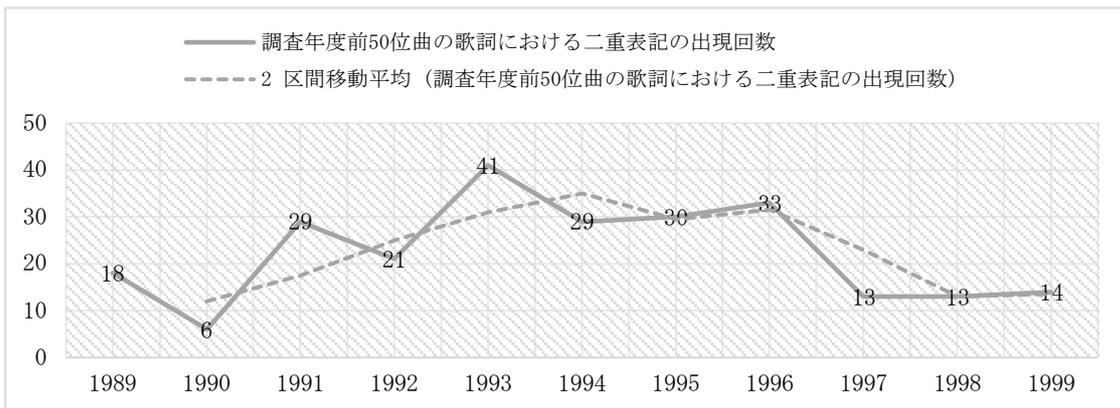


図1 延べ例数の年度別推移

次に、年度別変化を見ると、二重表記の延べ例数が出現率とともに1993年で最大値となることがわかったが、この11年間における二重表記の使用頻度の推移をより明らかにするため、図1と図2にある点線で示すように、隣接する2年間の移動平均を計算した。その結果、調査資料の起点である1989年と1990年から、二重表記の延べ例数と出現率は増加し、1993年と1994年の間で最大となり、その後減少する傾向が観察された。

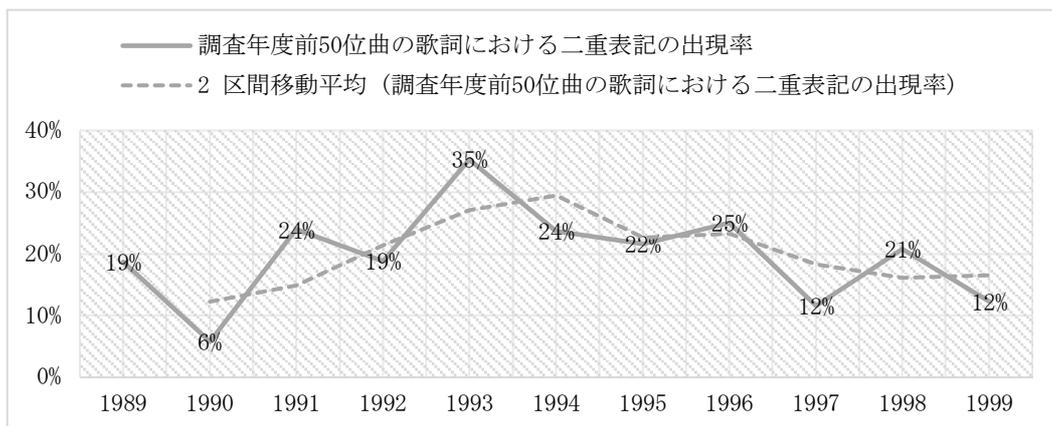


図2 出現率の年度別推移

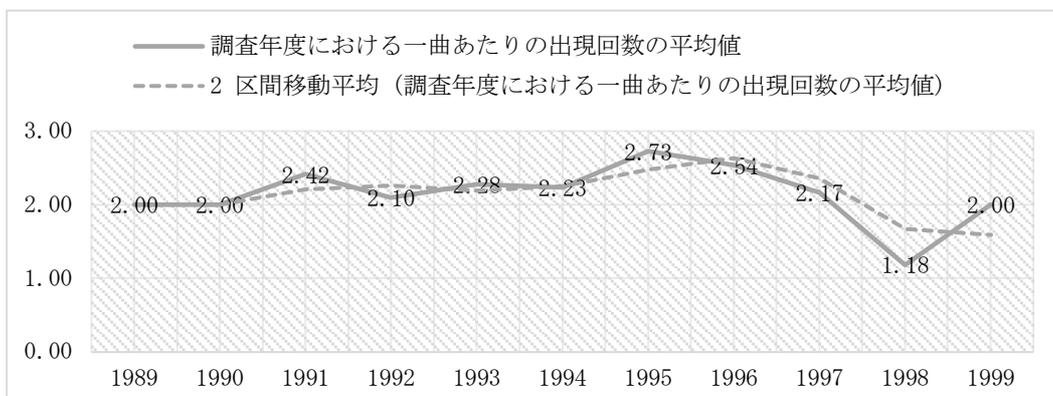


図3 一曲あたりの出現回数の年度別推移

また、歌詞に二重表記が使用されている曲ごとに、一曲あたりの二重表記の出現回数を集計し、各年度の平均値を算出した年度別の推移状況を図3に示す。二重表記が使用されている曲は、言い換えれば、それらの曲の歌詞に一曲あたりに必ず1回以上の頻度で二重表記が出現した曲である。図3からわかるように、前述の二重表記の使用率と延べ例数の場合と異なり、11年間における最小値の1.18回/曲は1998年に出現したが、その次は1989、1990、1999年における2回/曲である。同様に、最大値も1993年ではなく、1995年における2.83回/曲である。このように、歌詞に二重表記のある曲において、年度別に大きい変化は見られないが、一曲あたりの二重表記の出現回数は2回で安定していることが観察された。ただし、1990年代の半ばである1995年、1996年では、一曲あたりの出現回数が2.73回/曲という最大値に達したが、その後緩やかに減少し、2回/曲の平均値に戻ったことも確認された。

また、図4にまとめた、各年度の一曲あたりの出現回数の平均と分散を見てみると、図3と似た現象が観察された。1991年では12回/曲、1996年では14回/曲などのような平均値から大幅外れている出現頻度が観察された。また、表1でも示すように、歌詞に二重表記がある曲について、1995年における一曲あたりの二重表記の出現回数の標準偏差が最大であり、この年では二重表記の使用のばらつきが最も大きいことがわかる。

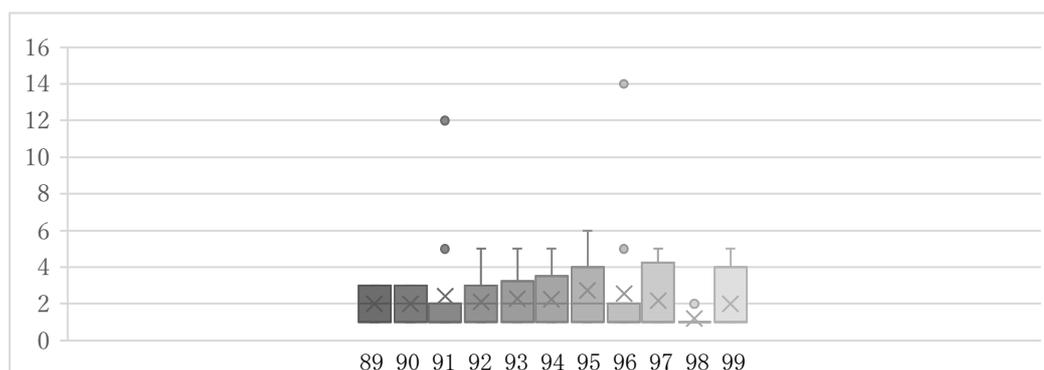


図4 調査年度における一曲あたりの出現回数の平均

このように、1989年から1999年までの約10年間においては、J-POPの歌詞に二重表記が出現している頻度が1989年から増加し、1993年と1994年の間で最大値となり、その後徐々に減少する傾向が見られるが、歌詞に二重表記のある曲については、1曲あたりに延べ2回で安定して使用されている。また、平均的に見ると、毎年オリコン年間ランキング売上上位にある曲の中で、二重表記が使用されている曲が調査曲数のうち20%の割合を占め、つまり、5曲の内1曲は歌詞に二重表記が2回使用されている可能性が高いと推測できる。

3.2 主表記の変化

本稿で収集した二重表記のデータを、「Web茶まめ³」を用いて形態素解析し、形態の面から見られる二重表記の変化を考察する。主表記と副表記に分け、それぞれの品詞、語種、文字の使用状況を年度別に集計した結果、図5～10のように集計した。

まず、主表記の形態論的变化を分析する。図5で示すように、品詞の観点から見ると、

³ 「Web茶まめ」とは、形態素解析辞書 UniDic を使用した形態素解析ツールである (<https://chamame.ninjal.ac.jp/>)。

1989～1990年と1998～1999年の調査資料の首尾において、主表記の品詞は名詞のみが観察された。その間に挟んだ1991年から1997年までの間では、主表記の品詞は2つ以上であるが、名詞の使用が80%以上を占めている。そのうちの1992年、1994年、1995年において、名詞以外に、代名詞や動詞、形状詞などそれぞれ3種の品詞が使用されている。

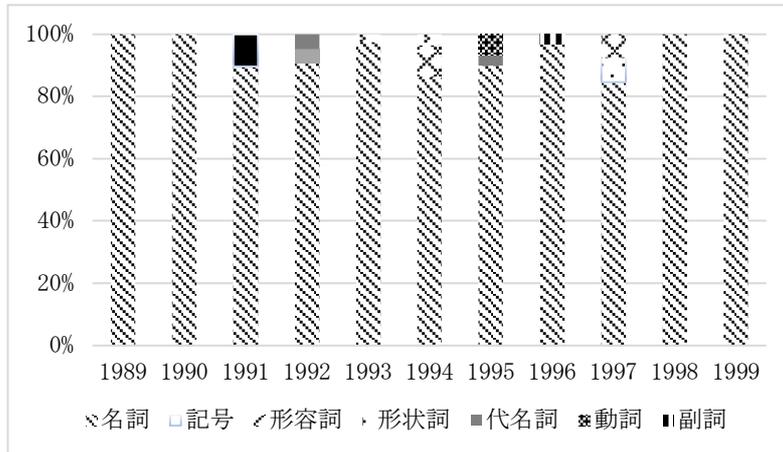


図5 各年度における主表記の品詞の割合

次に図6で示すように、語種の観点から見ると、一曲あたりの二重表記の出現回数の平均的最小値が現れた1998年には、漢語のみが観察されたが、それ以外の年度において、和語や固有語など、漢語以外の語種も見られる。漢語の使用の最小限となる1997年において、漢語がまだ50%以上を占めているが、和語である場合が40%の割合である。例えば、例(5)で示す「相手(ひと)」のような主表記が和語である例は延べ2回出現した。ここで、後述の副表記の場合と異なったのは、外来語の使用がない点である。

(5) これほどに相手(ひと)を好きになること

【出典】「For the moment」(1997) Every Little Thing (五十嵐充作詞)

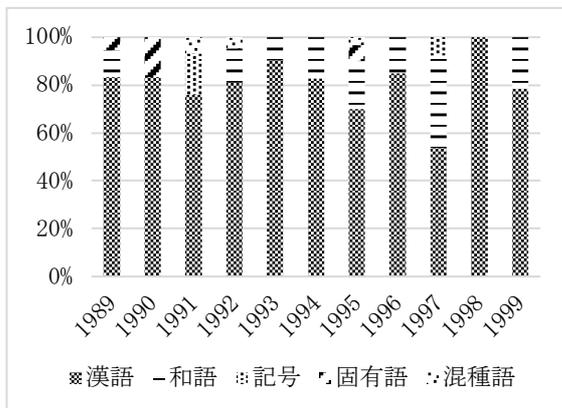


図6 各年度における主表記の語種の割合

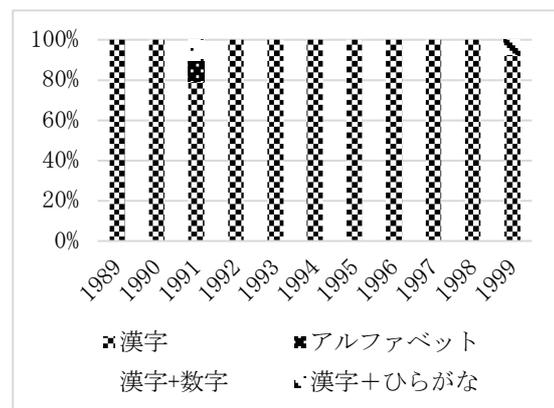


図7 各年度における主表記の文字種の割合

続いて図7で示すように、文字種の観点から見ると、大多数の年度において、漢字だけが使用されているが、漢字以外の文字の使用は1991年と1999年しか観察されなかった。実

際に調べると、1991年では、漢字と数字の組み合わせとアルファベットの使用が延べ6例、1999年では、漢字とひらがなの組み合わせが延べ1例あることがわかった。

このように、1989～1999年の約10年間に於いて、形態論的にみると、主表記における品詞、語種、文字種の変化は明確に見られなかったため、固定化している傾向があると考えられる。そのなか、品詞の使用に関しては、90年代中期である1994年、1995年などにおいて、初期と後期における名詞だけの使用と違い、3種以上の品詞の使用が観察されたが、後述の4節でわかるように、実際に本調査のデータを調べると、3種以上の場合でも、最大限に該当する年の調査曲数のうち、おおよそ10%のみを占めているため、はっきりとした時間的変化がないと言えるであろう。

3.3 副表記の変化

次に、副表記の形態論的变化を分析する。図8で示すように、品詞の観点から見ると、主表記と類似した現象が見られる。調査時期の始まりと終わりでは、名詞の割合が全体のうち80%以上を占めており、圧倒的に多いことがわかった。そのなか、1990年と1999年では、副表記の品詞は名詞のみである。ただ、90年代半ばである1994年をみると、動詞などの使用が増加し、名詞の割合が全体のうち69%に落ちている。また、二重表記の使用が最大値となる1993年では、副表記の品詞が名詞のほか、動詞、形状詞、形容詞、代名詞+助詞の5種も観察された。

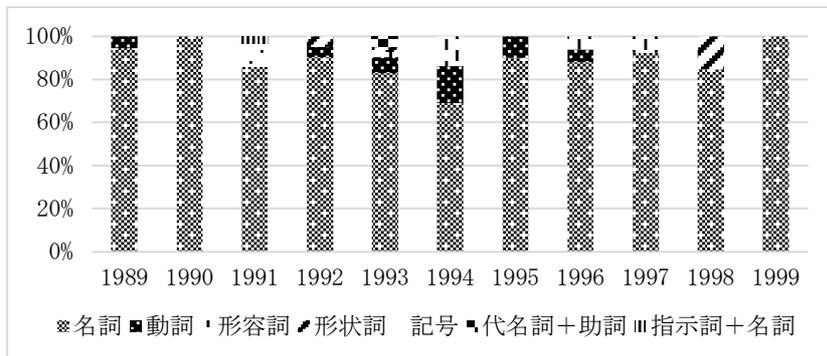


図8 各年度における副表記の品詞の割合

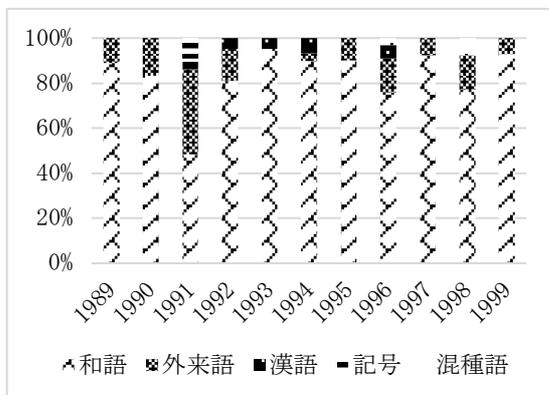


図9 各年度における副表記の語種の割合

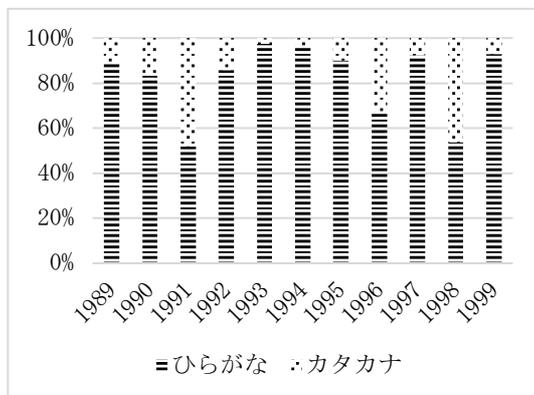


図10 各年度における副表記の文字の割合

図9で示すように、語種の観点から見ると、1989～1999年において、副表記の語種は和

語、外来語を基本とし、各年度に2種以上の語種が観察された。とくに、1991年と1996年では、副表記における語種は和語、外来語、漢語が出現した上に、それぞれ記号、混種語の使用が見られた。1991年において、外来語の使用は最大の38%となるが、それ以外は10%の割合で使用されている。

また、図10で示すように、文字種の観点から見ると、副表記がひらがなとカタカナの2つしか見られないが、1991年、1996年、1998年では、カタカナの使用は30%以上占めており、1991年では最大の48%となる。それに対し、副表記がひらがなである場合は最低でも50%以上を占めている。

このように、1989～1999年の約10年間において、形態論的にみると、副表記における語種と文字種の使用は主表記の分析と近似し、明確に時間的変化が見られなかった。また、品詞の使用については、調査時期の初期と後期では、名詞が圧倒的に多いことがわかる、その間の1990年代中期では、名詞の使用がまだ多く見られる以外に、動詞や形容詞などの使用も観察された。また、1991年と1996年において外来語とカタカナの使用が多く見られるが、それは一曲における一つの例が反復に出現しているためである。たとえば、例(6)と(7)で示す「90年代(ナインティーズ)」、「国境(ボーダー)」という二重表記がそれぞれ延べ3回と2回の頻度で「歌えなかったラヴ・ソング」という曲の歌詞に使用されている。例(8)と(9)で示す「浪漫人種(ピープル)」、「高温万歳(ブラボー)」という二重表記がそれぞれ延べ2回の頻度で「ネオ・ブラボー!!」という曲の歌詞に使用されて。このような同じ用例が一曲に延べ2回以上出現していることにより、その年の集計結果への影響があると考えられる。

- (6) 90年代(ナインティーズ)のラヴ・ソングを贈ろう
【出典】「歌えなかったラヴ・ソング」(1991) 織田裕二 (真名杏樹作詞)
- (7) 若さの国境(ボーダー)を越え
【出典】「歌えなかったラヴ・ソング」(1991) 織田裕二 (真名杏樹作詞)
- (8) 愛の夏来れば皆 “高温万歳(ブラボー)”
【出典】「ネオ・ブラボー!!」(1991) サザンオールスターズ (桑田佳祐作詞)
- (9) 太陽待ち焦がれた“浪漫人種(ピープル)”
【出典】「ネオ・ブラボー!!」(1991) サザンオールスターズ (桑田佳祐作詞)

4. 形態論的特徴

この節では、主表記と副表記の品詞、語種、文字種の関係を確認するため、本調査のデータにおける主表記と副表記の品詞、語種、文字種をそれぞれ集計し、まとめた結果を表2、表3、表4のように示す。

まず、品詞の観点からまとめた表2によると、主表記と副表記がそれぞれ「名詞」が圧倒的に多く出現していることが観察された。また、主表記と副表記の品詞構成の関係について、「名詞(名詞)」のパターンが全体のうち84%を占めており、それ以外に「名詞(動詞)」、「名詞(形容詞)」などの組み合わせも見られるが、いずれも10%以下の割合で出現している。

次に、語種の観点からまとめた表3によると、主表記が漢語である場合と副表記が和語である場合がそれぞれ81%、83%の割合で出現していることがわかった。また、主表記と副表

記の語種構成の関係については、最も多く出現している「漢語(和語)」は全体のうち 68%を占めており、それ以外に「漢語(外来語)」、「和語(和語)」のパターンも 10%ぐらいの割合であった。

表2 主表記と副表記の品詞構成の関係

| 副表記 | 名詞 | 動詞 | 形容詞 | 形状詞 | 記号 | 代名詞+助詞 | 指示詞+名詞 | 総計 |
|-----|--------------|----|-----|-----|----|--------|--------|--------------|
| 主表記 | | | | | | | | |
| 名詞 | 209 (84%) | 13 | 4 | 2 | 0 | 2 | 1 | 231 (94%) |
| 記号 | 1 | 0 | 0 | 0 | 3 | 0 | 0 | 4 |
| 形容詞 | 0 | 0 | 4 | 0 | 0 | 0 | 0 | 4 |
| 形状詞 | 1 | 0 | 0 | 2 | 0 | 0 | 0 | 3 |
| 代名詞 | 2 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 2 |
| 動詞 | 0 | 2 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 2 |
| 副詞 | 1 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 1 |
| 総計 | 214 (87%) | 15 | 8 | 4 | 3 | 2 | 1 | 247 |

表3 主表記と副表記の語種構成の関係

| 副表記 | 外来語 | 漢語 | 記号 | 混種語 | 和語 | 総計 |
|-----|---------|----|----|-----|----------|----------|
| 主表記 | | | | | | |
| 漢語 | 24(10%) | 7 | 0 | 2 | 167(68%) | 200(81%) |
| 記号 | 2 | 0 | 3 | 0 | 1 | 6 |
| 固有語 | 0 | 0 | 0 | 0 | 4 | 4 |
| 混種語 | 2 | 0 | 0 | 0 | 2 | 4 |
| 和語 | 2 | 1 | 0 | 0 | 30(12%) | 33 |
| 総計 | 30 | 8 | 3 | 2 | 204(83%) | 247 |

表4 主表記と副表記の文字種構成の関係

| 副表記 | カタカナ | ひらがな | 総計 |
|---------|---------|----------|----------|
| 主表記 | | | |
| アルファベット | 3 | 0 | 3 |
| 漢字 | 38(15%) | 202(82%) | 240(97%) |
| 漢字+ひらがな | 0 | 1 | 1 |
| 数字+漢字 | 3 | 0 | 3 |
| 総計 | 44 | 203(82%) | 247 |

また、文字種の観点からまとめた表4から、主表記が漢字である場合は最も多く、全体のうち 97%を占めていることがわかった。最も多く出現している副表記がひらがなであり、全体のうち 82%を占めている。主表記と副表記の文字種構成の関係については、「漢字(ひら

がな)」のパターンが82%の割合で出現しているが、それ以外に、「漢字(カタカナ)」のパターンが全体のうち15%を占めている。

以上の分析から、J-POPの歌詞における「主表記(副表記)」のような型式をもつ二重表記について、品詞の構成は「名詞(名詞)」, 語種の構成は「漢語(和語)」, 文字種の構成は「漢字(ひらがな)」のパターンが圧倒的に多いことが推測できる。なお、「名詞(名詞)」と「漢字(ひらがな)」の組み合わせがそれぞれ全体のうち80%以上を占めているが、「漢語(和語)」の組み合わせがやや低めの68%の割合で使用されている。また、語種の構成に関しては、「暗闇(やみ)」, 「相手(ひと)」のような「和語(和語)」のパターンと、上記でも言及している「国境(ボーダー)」, 「浪漫人種(ピープル)」のような「漢語(外来語)」のパターンも見られる。

5. おわりに

本研究はJ-POPという概念が誕生した後1989年から1999年までの約10年間において、各年度オリコン年間ランキング上位50位にあるJ-POP楽曲の歌詞から、抽出した二重表記の実例を形態素解析し、二重表記の品詞、語種、文字種の構成について、時間的変化と共時的特徴を調査した。本稿で明らかにした結果を以下のようにまとめた。

①J-POPの歌詞における二重表記の使用頻度については、以下の2点が挙げられる。

まず、歌詞における二重表記の延べ例数と出現率は1989年から増加し、1993年と1994年の間で最大となり、その後減少する傾向がある。

次に、二重表記が使用されている曲は調査曲数のうち約20%を占めており、これらの20%の曲において、二重表記は一曲あたりに2回の頻度で安定して出現している。

②J-POPの歌詞における二重表記の形態論的特徴については、以下の4点が挙げられる:

1点目は、「主表記(副表記)」のような型式をもつ二重表記について、品詞から見ると「名詞(名詞)」, 語種から見ると「漢語(和語)」, 文字種から見ると「漢字(ひらがな)」のパターンが圧倒的に多い。

2点目は、品詞の観点から見ると、主表記と副表記が最初に名詞だけが使用されているが、その後は動詞や形容詞などの品詞も出現し、最後にまた名詞だけの使用に戻る。

3点目は、語種の観点から見ると、漢語である主表記と和語である副表記と組み合わせた二重表記が安定して使用されている。ただし、1997年における和語である主表記の使用や、1991年における外来語である副表記の使用などが例外的に多く見られる。

4点目は、文字種の観点から見ると、漢字である主表記が安定して使用されているが、ひらがなである副表記は最初から減少し、1991年で最低値となるが、その後増加し、1993年と1994年では最大値と達したが、その後はまた減少していく傾向がある。

なお、本研究で観察した範囲では、形態論的特徴の時間的な変化は明確に見られなかった。ただし、今回は調査曲数が少なく、例外的に二重表記が多く出現した少数の曲の影響がある可能性を考え、今後、調査資料の範囲を見直し、多量のデータを用い、統計的な検定を加えて分析する必要がある。また、実際に出てくる実例の中、高頻度で出現している典型的な二重表記について考察し、歌詞における二重表記の使用実態を明らかにすることも今後の課題である。

文 献

石黒圭(2005). 「ルビと複線的テキスト」『よくわかる文章表現の技術III 文法編』, pp.238-254, 明治書院

- 泉文明(1993). 「二重表記の現在—短歌・俳句の表記の調査—」『日本語学』12(3),pp.95-104, 明治書院
- 伊藤雅光(2017). 『J ポップの日本語研究—創作型人工知能のために—』朝倉書店
- 岩淵匡(1988). 「振り仮名の役割」『日本語の文字・表記(下)』(講座日本語と日本語教育 9), pp.58-86,明治書院
- 烏賀陽弘道(2005). 『J ポップとは何か:巨大化する音楽産業』岩波書店
- 大出彩・松本文子・金子貴昭(2013). 「流行歌から見る歌詞の年代別変化」『じんもんこん 2013 論文集』(4),pp.103-110
- 小駒勝美(2014). 「「自由度」こそ日本漢字の魅力」『日本語文字・表記の難しさとおもしろさ』高田智和・横山詔一編,pp.34-53,彩流社
- 小林雄一郎・天笠美咲・鈴木崇史(2015). 「語彙指標を用いた流行歌の歌詞の通時的分析」『人文科学とコンピュータシンポジウム』(12),pp.23-30, 情報処理学会
- 今野真二(2009). 『振仮名の歴史』集英社
- 笹原宏之(2011). 『漢字の現在:リアルな文字生活と日本語』三省堂
- 佐竹秀雄(2005). 「現代日本語の文字と書記法」『朝倉日本語講座 2 文字・書記』北原保雄監修・林史典編,pp.22-50,朝倉書店

関連 URL

- オリコンミュージックストア配信サービス『オリコン年間 CD シングルランキング(1989-1999 年)』 <https://music.oricon.co.jp/php/special/Special.php?pcd=yrankindex>
- 歌詞検索サービス『歌ネット』 <https://www.uta-net.com/>
- 形態素解析ツール『Web 茶まめ』 <https://chamame.ninjal.ac.jp/>
- 形態素解析用電子化辞書『UniDic』 <https://unidic.ninjal.ac.jp/>
- 三省堂『スーパー大辞林 3.0』 <https://www.sanseido-publ.co.jp/publ/ep/web/wm01.html>
- 文化庁『常用漢字表』 https://www.bunka.go.jp/kokugo_nihongo/sisaku/joho/joho/kijun/naikaku/pdf/joyokanjihyo_20101130.pdf